

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：25403

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00477

研究課題名（和文）フランス・ブルターニュ地方における近現代の文芸運動とナショナリズム

研究課題名（英文）Modern literary movements and nationalism in Brittany, France

研究代表者

大場 静枝（OBA, Shizue）

広島市立大学・国際学部・教授

研究者番号：60547024

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：地域に固有の言語で、地域や民族のアイデンティティを主題とする豊かな文学が存在するにもかかわらず、これまで日本においてブルターニュ地方の文学はほとんど研究されてこなかった。本研究の成果は、19世紀後半から両大戦間期までの期間に民族運動に生涯を捧げたブルターニュ出身の3人の民族主義文学者ジャン=ピエール・カロク（筆名ブレイモール）、カミーユ・ル・メルシエ・デルム、ロパルス・エモン の作品分析や、民族運動と作品との影響関係の考察を通して、これまで知られることになったブルターニュ地方の民族ナショナリズムと文芸運動の関係を解明し、この時代のブルターニュの文学の輪郭や特徴を明らかにした ことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の研究成果の学術的意義や社会的意義として、これまで日本ではほとんど研究されることのなかった、19世紀後半から両大戦間期までのブルターニュ人民族主義作家や彼らの作品を調査することで、この時代のブルターニュ人作家の文学的営為やブルターニュの民族運動を日本に紹介した点が挙げられる。さらに本研究は、申請者の研究を書物化したことで、研究成果の社会への還元を行うとともに、日本におけるブルターニュ地方の文学研究を前進させることにも貢献した。

研究成果の概要（英文）：Despite the existence of a rich literature that deals with regional and ethnic identity in a language specific to the region, the literature of Brittany has so far been little studied in Japan.

Focusing on three writers and poets from Brittany who devoted their lives to the nationalist movement aiming for decentralization or independence, our research explores how nationalist ideals were expressed in the literary works of Jean-Pierre Calloc'h (writing under the pen name of Bleimor), Camille Le Mercier d'Erm, and Roparz Hemon. This research has elucidated the relationship between ethnic nationalism and literary movements in Brittany and further clarified the contours and characteristics of Brittany's literature from the late 19th century to the interwar period.

研究分野：フランス文学

キーワード：ブルターニュ民族運動 ジャン=ピエール・カロク（ブレイモール） カミーユ・ル・メルシエ・デルム
ロパルス・エモン 『バルザス=ブレイス』 ブルトン語 民族ナショナリズム

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

フランス文学には基本的に「地方文学」という領域や概念は存在しない。というのもフランス文学とは、フランス国籍をもつ作家によって書かれた作品、ないしはフランス語で書かれた作品の総体を指し、フランス語で書かれた作品であれば、地方の文学作品もまたフランス文学という大きな括りの中に包含されるからである。しかしながら、地域や民族のアイデンティティを強く意識する作家たちによる作品は、それが地域語ではなくフランス語で発表されたもののだとしても、単純にフランス文学の範疇に含めることは妥当であろうか。地方の文学が確固としたアイデンティティをもつ一つの領域として成立することがなかったその背景には、フランスの中央集権主義・一言語主義政策の存在と地域ごとに異なる様々な事情があったと考えられる。1789年の革命以後、フランスは「一つにして不可分のフランス」を掲げ、一貫して中央集権主義・一言語主義政策を推し進めた。その結果、国内における言語統一の一環として、フランス語の急速な普及と地域語の殲滅が図られた。

個別の事情については、ブルターニュ地方の文学の場合、使用言語の問題と民族運動の活発化が大きく影響したと考えられる。まず言語の問題であるが、ブルトン語のように文字を有する言語であっても、1539年のヴィレール=コトレの勅令以後、人々は文字言語で発表をするときには「国語」であるフランス語を用いることが一般的であった。さらに、19世紀の教育改革によりフランス語が全土に普及すると、ブルトン語の母語話者の多くがフランス語の識字者となったが、ブルトン語は相変わらず庶民の口語として使われ、識字率が低いまま、話者人口を減らしていった。さらに地方との関係が深い文芸作品は口承の民謡や民話、あるいは土地の歴史や風俗を主題にした作品であることが多かったが、その読者対象は非識字者である地域の民衆ではなく、貴族やブルジョワたちであった。文字言語で記された「文学」とは、ある意味で上層の社会階層やエリート層にのみ関係するものであった。しかもフランス文学史を紐解くと、庶民の間で語り継がれてきた民謡や民間伝承の類いを正統な文学だとは認めない風潮もあった。この点については、ジェラルド・ド・ネルヴァルは「16世紀詩人論」の中で民謡など「脚韻や韻律法、あるいは構文法を気にせずになされた詩が書物のなかに収められるのを誰も認めようとしなかった」と述べ、あるいは「ヴァロワ地方の民謡と伝説」の中でも「フランスでは、文学がついぞ一度も一般大衆の水準まで下りたためしはない」と書いた。

ナショナリズムの観点からも、地方の文学は市民権を得ることがなかった。フランス革命は、自由・平等・友愛の理念のもとに、普遍的な権利である人権をもつ個人が国家を形成するという新しい考え方を誕生させた。そしてそれは同時に、歴史や伝統に根ざした民族の共同体という概念をも生み出した。その結果、フランスにおけるナショナリズムにはより強い中央集権国家を作り上げる動きと、地方において分離独立を目指す動きに二分されることになった。その中で地域の文学作品は、民族のアイデンティティの探求と結びついて言語ナショナリズムの基盤を築いていった。そうした動きの一例が、ヴィルマルケやブリズー、フェヴァル等ブルターニュ出身の作家たちの文学活動である。

20世紀に入ると、ブルターニュの文芸運動はより政治的な様相を帯びてくる。文芸運動における民族ナショナリズムは、主に民族や言語や地域の歴史の固有性に立脚し、反フランスの形を取った。この時代、固有の言語を有する他地域においても、民族の言語で表現することが重視されるようになったが、ブルターニュではブルトン語の識字率の低迷によりブルトン語で作品を発表しても読者を得られないというジレンマの中、民族運動に身を投じた文学者の多くがフラ

ンス語で作品を発表することを余儀なくされた。フランス語で活動する文学者が自らの作品を「ブルターニュ文学」と位置づけても、ロパルス・エモンのようにブルトン語での表現にこだわった者たちの目には、彼らの作品の多くは、ブルターニュの文学としての確固たるアイデンティティが欠けていると映った。加えて、地方の分離独立運動は中央集権国家であるフランスにとって決して容認できるものではなく、民族運動と結びついた地域の文学は中央の文壇からは黙殺された。

ブルターニュ地方の文学とはいかなるものなのか。本研究はこの疑問を出発点に、以上の背景を踏まえて、民族ナショナリズムが萌した19世紀後半から第二次世界大戦終結時までの約100年間⁽¹⁾に時代を限定し、ブルターニュ出身の作家たちの文芸運動や彼らの作品を調査することで、ブルターニュ文学の輪郭や特徴を描き出すことを目指した。

(1) 新型コロナウイルス感染症の拡大及びその後の国際情勢の変化によりフランス出張が制限されたため、十分に文献調査をすることができず、研究対象期間を両大戦間期（～1930年）に短縮した。

2．研究の目的

本研究の具体的な目的は、これまで日本ではほとんど知られることのなかった、ブルトン語で作品を発表したブルターニュ人民族主義作家の文芸運動や彼らの作品を調査することで、(1)ブルターニュの文学と民族ナショナリズムの関係を解明すること、そして(2)19世紀後半から両大戦間期までのブルターニュ地方の文学の特徴の一端を解明することである。本研究によって、これまで闇に包まれていた戦時下の文学、とりわけ第一次世界大戦下及び両大戦間期の文学の諸相の一つを提示することを目指した。

さらに本研究では、日本におけるブルターニュ地方の文学研究を前進させることを目的に、申請者の研究を書物化することも企図した。

3．研究の方法

前述の研究の目的にしたがい、以下の過程で本研究を進めた。

(1) ブルターニュの文学と民族ナショナリズムの関係の解明

ブルターニュの文学と民族ナショナリズムの関係を明らかにするために、19世紀末にブルターニュ地方に民族運動が誕生したその時代背景に関する調査と民族運動の誕生と発展に文芸作品がどのような関わりをもっていたかについての考察を行った。

の調査では、フランスにおいてナショナリズムが生成・発展していった時代背景には、18世紀末から19世紀前半にかけて見られた国民概念の形成と（前）ロマン主義の潮流があり、それらを結びつける要素の一つに「民謡の発見」があったと仮定して、その証明を行った。この点を明らかにするために、民謡を国民文学と位置づけるヘルダーの民謡観がフランスに与えた影響に着目し、ヘルダーの民謡観のフランスやブルターニュにおける受容を考察した。

の研究では、の研究で得られた知見を基に、当時の新聞や雑誌を調査して、民族運動に関わった文学者や文化人の言説をたどり、この地域のナショナリズムの萌芽に民謡集『バルザス=ブレイス』が関係していたことを明らかにした。また、この調査は文芸運動が20世紀初頭の民族運動、とりわけ急進派の活動に関係したことを解明する研究につながるものであった。

(2) ブルターニュの文学の特徴の解明

まず、(1)の研究で得た知見に基づいて、『バルザス=ブレイス』に影響を受けた作家や詩人に注目して調査を行った。その後、若い頃に『バルザス=ブレイス』に影響を受けたこと、民族運動にその生涯を捧げたこと、作品を発表する際に、意識して使用言語を選択していることの3点を条件に、使用言語に対する立場が異なる3人の文学者を選定し、作品分析を行った。一人目のプレイモール（ジャン=ピエール・カロク）は、その多くの作品に対してブルトン語の

ヴァンヌ方言とフランス語の二言語で同一作品を発表した詩人である。二人目のカミーユ・ル・メルシエ・デルムは、フランス語を発表の言語に定めて作品作りをした詩人である。最後のロパルス・エモンは読者数が減少しても、民族の言葉で発表することを重視し、生涯ブルトン語のみで創作活動を続けた文学者である。なお、作品の分析については作者自身が書いたフランス語版テキストを利用したが、エモンについてのみ第三者によるフランス語翻訳版を用いた。

プレイモールに関する研究については、次の2点の考察を行った。地方分権主義が誕生した背景をブルターニュの貧困と言語状況の観点から考察したうえで、地方分権主義連合のイデオロギーを分析した。生涯と作品、論壇における彼の発言の分析を通して、当時の民族運動の一端を浮かび上がらせるとともに、民族運動がプレイモールの文学的営為にどのような影響をもたらしたかを検討した。主な分析対象作品として、詩集『ひざまづいて』と地方分権主義の新聞『ル・ペイ・ブルトン』紙に掲載されたプレイモールの論説を取り上げた。

カミーユ・ル・メルシエ・デルムについては、主に次の2点を考察した。分離独立運動が開始された時代背景を調査し、ブルターニュ国民主義党のマニフェストを検討することで党のイデオロギーを考察した。ブルターニュ国民主義党を創設した詩人カミーユ・ル・メルシエ・デルムの前半生と初期作品、とりわけナショナリズム文学への転向を示す転換点となった作品の分析を通して、ル・メルシエ・デルムが作風を「社会参加の詩」へと変化させるまでの道程を考察した。主な分析対象作品は「ブルターニュ国民主義党のマニフェスト」、『《戦争》?……内なる反抗の詩』及び『アイルランドよ、永遠なれ! 1916年の殉教者たちへの頌詩』、『ブルターニュ・アルモリカのバルドと国民詩人 19世紀・20世紀の現代詞華集』である。

ロパルス・エモンの考察では、両大戦間期の民族運動、分離独立派の機関誌『ブレイス・アタオ』及び文芸誌『グワラルン』の誕生の背景、及び両誌のマニフェストの分析を通して、民族運動と言語文化擁護の関係の一端を明らかにした。さらにロパルス・エモンが『ブレイス・アタオ』誌及び『グワラルン』誌に掲載した初期の論説(後にその一部が『ブルターニュを再発見したブルターニュ人』に収録)を手がかりに、エモンの言語観と文学観を考察し、彼が国民文学としてその創造を希求したブルトン語文学がいかなるものだったのかを解明した。主な分析対象作品は『ブレイス・アタオ』誌、『グワラルン』誌、『ブルターニュを再発見したブルターニュ人』である。

4. 研究成果

日本において、フランスのブルターニュ地方をフィールドとする研究は、これまで主として歴史学、言語学、民俗学を中心に学際的な視点で行われてきた。しかしながら、プロヴァンス文学と同様、地域に固有の言語で、地域や民族のアイデンティティを主題とする豊かな文学が存在するにもかかわらず、これまでこの地方の文学はほとんど研究されてこなかった。本研究の成果は、19世紀後半から両大戦間期までの期間に民族運動に生涯を捧げたブルターニュ出身の文学者を調査・研究することで、これまで知られることになったブルターニュ地方の民族ナショナリズムと文芸運動の関係を解明し、この時代のブルターニュの文学の輪郭や特徴の一端を明らかにしたことである。

本研究の成果は主として以下の3点にまとめられる。

(1) 民族運動と文芸運動の相関関係の解明

19世紀末にブルターニュ地方に民族ナショナリズムが誕生した時代背景と『バルザス=ブレイス』が民族運動に与えた影響を解明した。民謡集『バルザス=ブレイス』第2版及び第3版で表現された「抵抗の物語詩」がこの民謡集を手にとった多くのブルターニュ人に特別な感情を呼

び起こし、人々の目を郷土が抱える社会問題へと向けさせた点に注目し、これがブルターニュ人の覚醒となり、後に「エムザウ」と呼ばれるブルターニュの民族運動の端緒となったことを明らかにした。

研究成果は「『バルザス=プレイス』に見るブルターニュ地方の民族文学の誕生 19世紀における国民概念の成立とロマン主義を背景に」(『広島国際研究』第26号、2020年)及び「『バルザス=プレイス』の誕生とバルザス=プレイス論争」「ナショナリズムと国民(民族)文学の黎明」(共に『抵抗のブルターニュ』、小鳥遊書房、2023年)にまとめた。

(2) 民族主義文学者たちの作風の解明

『バルザス=プレイス』に影響を受けた3人の民族主義文学者ブレイモール、カミーユ・ル・メルシエ・デルム、ロパルス・エモンの作品分析や民族運動と作品との影響関係の考察を通して、作品に祖国の英雄たちの事績や自己犠牲の精神、民衆の忍従と不屈を投影させることがブルターニュ文学の特徴の一つになりうることを明らかにした。

ブルターニュ地方分権主義連合に共鳴したブレイモールについては、民族運動とカトリックの思想が郷土の歴史観に根ざしていたことを確認したうえで、その生涯と作品、新聞・雑誌に寄稿した論説文の分析を通して、民族主義と信仰と言語の擁護が郷土愛に分かち難く結びつくものであったことを明らかにした。その研究成果は「信仰と郷土愛に生きた詩人ブレイモール フランス・ブルターニュ地方の民族運動を背景に」(『周縁に目を凝らす』、彩流社、2021年)及び「信仰と郷土愛に生きた詩人ブレイモール」(『抵抗のブルターニュ』、小鳥遊書房、2023年)にまとめた。

カミーユ・ル・メルシエ・デルムに関しては、彼の前半生を丹念に調査することで、民族主義の詩人として自己を確立するに至ったその道程を確認したうえで、反戦と民族独立を主題とする詩集の分析を通して、社会参加の詩の本質を解明した。この詩風の特徴の一つは、歴史的イベントや歴史上の人物に言及して「抵抗の神話」を作り上げることであった。研究成果は「カミーユ・ル・メルシエ・デルムの詩に見る民族主義 分離独立主義の台頭と第一期PNBの誕生を背景に」(『広島国際研究』第27号、2021年)及び「社会参加の詩人カミーユ・ル・メルシエ・デルム」(『抵抗のブルターニュ』、小鳥遊書房、2023年)にまとめた。

最後のロパルス・エモンについては、『プレイス・アタオ』誌、『グワラルン』誌、及び両誌から言語と文学に関する論考をまとめた論説集『ブルターニュを再発見したブルターニュ人』の分析を通して、エモンの言語観と文学観を明らかにした。エモンが目指したのは、普遍的に使われる言文一致の標準ブルトン語の整備と、その言語を使った真のブルトン語文学の創造だった。エモンは言語と文学の実践の場として『グワラルン』誌を創刊したが、それは同時にブルトン語で作品を発表する若きブルトン語文学者を育成する場でもあった。研究成果の一部は「ブルトン語文学の創造を希求した作家ロパルス・エモン」(『抵抗のブルターニュ』、小鳥遊書房、2023年)にまとめた。

(3) 『抵抗のブルターニュ 言葉と文化を守った人々の闘い』の刊行

前述の(1)と(2)の成果に、ブルターニュの歴史、ブルトン語史、フランスの言語政策史の観点から「ブルターニュの抵抗の歴史」を概観した章(「抗う人々の歴史」「ブルトン語の受難」)及び少数言語となったブルトン語の現状やブルターニュ地方の言語政策、教育機関におけるブルトン語の保護運動に関する章(「ブルトン語の危機」「ブルターニュ地方の言語政策」)を加え、『抵抗のブルターニュ 言葉と文化を守った人々の闘い』(小鳥遊書房)を2023年に刊行し、研究成果の一般への公表とした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 大場静枝	4. 巻 -
2. 論文標題 「文人たちが見たブルターニュ」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 展覧会カタログ『憧憬の地ブルターニュ モネ、ゴッガン、黒田精輝らが見た異郷』	6. 最初と最後の頁 pp. 54-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大場静枝	4. 巻 第27巻
2. 論文標題 「カミーユ・ル・メルシエ・デルムの詩に見る民族主義 分離独立主義の台頭と第一期PNBの誕生を背景に」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『広島国際研究』	6. 最初と最後の頁 pp. 91-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大場静枝	4. 巻 第26巻
2. 論文標題 「『バルザス=ブレイス』に見るブルターニュ地方の民族文学の誕生 19世紀における国民概念の成立とロマン主義を背景に」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『広島国際研究』	6. 最初と最後の頁 77-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 広島市立大学国際学部多文化共生プログラム（編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 423
3. 書名 『周縁に目を凝らす マイノリティの言語・記憶・生の実践』（pp. 171-211）	

1. 著者名 大場静枝	4. 発行年 2023年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 496
3. 書名 『抵抗のブルターニュ 言葉と文化を守った人々の闘い』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

講演会（計2件） 大場静枝 「文人たちが見たブルターニュ」 国立西洋美術館 「憧憬の地ブルターニュ モネ、ゴーガン、黒田精輝らが見た異郷」展 講演会 2023年5月13日 オンライン 大場静枝 「ブルターニュの言葉と文化」 広島県立美術館 「ブルターニュの光と風」展 講演会 2024年5月11日 広島県立美術館
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------